

論文

ヘルダーリンの『多島海』「天空に響く兄弟たちの調べ」からキケロの『スキピオの夢』へ

Comments on Hölderlin's 'Der Archipelagus' and Cicero's 'Somnium Scipionis'

兵頭 俊樹

クロスカル教育機構教養協働教育部門

ヘルダーリンの『多島海』の冒頭部からは、キケロの『スキピオの夢』に現れる天球の音楽が聞きとれる。ドイツの詩人の汎神論的な世界に見られるその影響を概観したのち、『スキピオの夢』の幾つかの問題点をとりあげる。またキケロは天球の音楽に関して、天体の運行や音程の数学のようなピュタゴラス的な厳密さを志向するよりは、これを理想国家の調和の比喩としてとらえ、むしろその文学的表現を目指したことを論じる。

キーワード：ヘルダーリン、スキピオの夢、天球の音楽

第1部^[1]

ヘルダーリンはドイツ文学史上、古典主義とロマン主義の間に位置する詩人である。その『多島海』は叙事詩の韻律ヘクサメターで書かれた300行近くに及ぶ長大な詩で、古代ギリシアの盛衰を描く歴史絵巻でもあり、哀歌と賛歌が入り混じった調子で描かれる汎神論的世界でもある。この詩のタイトルともなり、また度々「あなた」と呼びかけられるアルヒペラグスは、地中海にあってギリシアと小アジアの間に位置する多島海（エーゲ海）を意味するが、源をたどれば原初の海、太古の昔から変わらずに存在する半ば神格化された大いなる海といったと含みを持つと思われる。この詩の冒頭部に次のような一節がある。

そして光うすれる夕べとなり / アジアの山の彼方から聖なる月の光の / さしそめ、星々も波間に行き交えば / 天上の輝きにあなたも照り映え、やがて星影の移るがままに / 潮の流れも変わりゆき、天の兄弟のうたう調べ、 / 星々の夜の歌が愛にあふれるあなたの胸にこだまする^[2]。

und oft am dämmernden Abend, / Wenn von Asiens Bergen herein das heilige Mondlicht / Kömmt und die Sterne sich in deiner Woge begegnen, / Leuchtest du von himmlischem Glanz, und so, wie sie wandeln, / Wechseln die Wasser dir, es tönt die Weise der Brüder / Droben, ihr Nachtgesang, im liebenden Busen dir wider.

ヨッヘン・シュミット編の全集では「天空の兄弟たちの調べが響く」(es tönt die Weise der Brüder / Droben...wider)の詩句の注に、キケロの「スキピオの夢」との関連が示唆されていて、さらにゲーテの『ファウスト』「天上の序曲」の冒頭が引用されている。

太陽はむかしのままに
同胞の星の群と歌をきそい
その定められた道を
すさまじい音をたててすすむ^[3]。
Die Sonne tönt nach alter Weise
In Brudersphären Wettgesang,
Und ihre vorgeschriebene Reise
Vollendet sie mit Donnergang.

ヘルダーリンが『多島海』を、ゲーテが「天上の序曲」を書いたのはちょうど1800年頃である。成立時期の一致が単なる偶然なのか、またこの二つの詩が「スキピオの夢」と直接に関係しているのかはわからない。ちなみにモーツァルトが『シピオーネ(スキピオ)の夢』を作曲したのは1771年で、ヘルダーリンの生まれた翌年である。ついでに言えば、ヘルダーリンと同年生まれのベートーベンの第九の合唱の部分はシラーの詩がもとなっているが、この詩人はヘルダーリンよりも10歳ばかり年上のいわば同郷の先輩で、彼の初期の詩には大

きな影響を及ぼしている。1785年に書かれたシラーの「喜びに寄す」の一節。

神の星々が壮麗な空の平原を駆けめぐるように、
兄弟たちよ、喜び勇んでお前たちの軌道を走れ、
英雄が勝利を目指してひた走るように、

Froh, wie seine Sonnen fliegen,

Durch des Himmels prächtigen Plan,

Laufet, Brüder, eure Bahn,

Freudig, wie ein Held zum Siegen.

三詩人に共通するのは天空の星の兄弟たちの軌道である。さらにゲーテとヘルダーリンでは、周回する星の軌道から調べが生じる。ヘルダーリンはさらにこれに海神の潮の流れを呼応させる。彼の汎神論的な世界では、星々の逍遥にあわせるように、地球の原初から変わらぬ海の波はたゆたい、夜の歌ともいべき太陽系の他の惑星や恒星天の発する調べが、兄弟の地球の水底にこだまする。

ドイツの詩人・作曲家たちをいささか強引に結びつけたかもしれない。天の軌道を廻る太陽と月と惑星及び恒星天が発する楽音について述べるキケロの『スキピオの夢』から彼らが直接に影響を受けているとまでは言えなくても、この著作が5世紀のマクロビウスの注釈により、中世を経てルネサンスから近代にいたるまでよく知られていたことを考えれば、少なくとも間接的な影響はあると言えるだろう。天球の音楽は文学や音楽だけでなく、近代の科学にもなお影響を及ぼしている。コペルニクスの地動説を数学的に証明したといえるケプラーも、天球の音楽の音程を数で表そうとし、その『宇宙の調和』には地動説に基づきながら惑星名と数字の他にいくつもの音符が記されている。

ところでキケロの『スキピオの夢』の宇宙像は、プラトンの『国家』や『ティマイオス』に遡り、プラトンはさらにピュタゴラスないしその学派に遡るといふ。ヘルダーリンの「天空に響く兄弟たちの調べ」の源流を尋ねて「天球の音楽」を聞いたというピュタゴラスにまでたどりつくには、天文学や音楽の他にも数学の知識が要求される。今回は『スキピオの夢』にとどめたい。

キケロがこれを書いたのは前54-51年で、半ばは散逸している『国家について』の最終第6巻の一部であるとされる。プラトンの『国家』よりは3世紀ほど後、

天動説を完成したプトレマイオスよりは2世紀ほど前のことになる。

前129年、小スキピオは邸宅で友人たちに二十年前に見た夢のことを物語っている。第三次ポエニ戦争でアフリカに来ていた前149年のこと、第二次戦争でハンニバルを破った祖父の大スキピオが夢の中に現れ、彼におよそ次のような宇宙を指し示す。不動の地球を中心にして八つの球がそのまわりを廻っている。内側から月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星、恒星天の順である。水星と金星は太陽に「従者のように侍り従う」^[4]。恒星天に対し他の球は「反対の方向へ動きながら、後向きに回って行く。」速さは恒星天が最も速く、月が最も遅い。こうしたありさまに驚いて見入っていた小スキピオがふとわれに返って祖父に尋ねる。「おや？ これは。なんの音ですか。私の耳いっぱい聞こえている、これほど大きな、しかも、これほど美しい音は？」祖父は答えて言う。「これこそ、あの古来名高い音であるぞ。これを内部から割り分けているいくつもの隔ての間は、等しくないとはいえ、一定の比に従うきまり正しい差異を持つ。」さらに彼の説明は続く。八つの天球の速い動きは必然的に音をとまなう。軌道間の距離の違いのために八つの球の速さは異なっており、動きの速い恒星天が最も高い音を、遅い月が最も低い音をだす。ただしこれら八つの道のうちには「動きの力の同じものが二つあるので、音の種類は七つとなる。」

地球が自転することなく中心にあって、八つの球が一日におよそ一周するとなれば、各々の球の速さは外側のものほど速くなる。水星と金星が太陽の従者に擬せられているのは、実際には太陽を中心に地球の内側の軌道を廻るこの二つの惑星と太陽との離角が地上から見て一定以上にならず、太陽の前後をうろろしているように見えるからであろう。

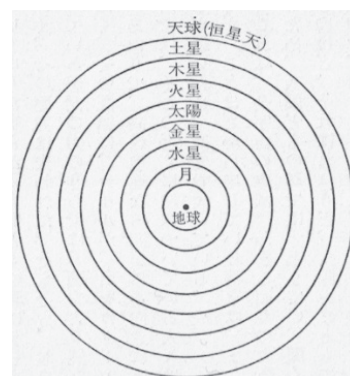


図1. スキピオの夢の惑星などの順

八つの天球が出す音がなぜ七つなのか。「動きの力」とはなにか。その力が同じもの二つとは。これらのことをキケロ自身は詳しくは述べてはいない。ただ *illi autem octo cursus, in quibus eadem vis est duorum, septem efficiunt distinctos intervallis sonos* と、ごくわかりきったことでもあるかのような口ぶりである。邦訳以外からも幾つか訳をあげる。But the other eight spheres, two of which move with the same velocity, produce seven different sounds (C. Keyes) ; Die acht Umläufe aber, von denen zwei die gleiche Bewegungsenergie haben, bringen *sieben* verschieden abgestufte Töne hervor (H. Zekl) ; In this way the eight orbits, of which two have the same effect, make seven distinct notes, seperated by intervals (J. Powell) .

動きの力, velocity, Bewegungsenergie, effect などと訳されている *vis* という語でキケロは何を想像していたのであろう。邦訳の注はこの力が同じ二つを水星と金星であるとしている。これはマクロビウスの注釈にまで遡り、ずっと支持されてきたらしく、これよりも少し前にある「水星と金星は従者のように太陽に侍り従う」という箇所と結びつけた解釈のようである。この場合キケロは、力が同じ二つの天球があるという認識が先にあって八つの天球が七つの音を出すという結論に至ったというよりは、ピュタゴラスないしその学派以来の七弦琴と七つの星（恒星天を除いた五惑星と太陽と月）に共通する七という数がまず念頭にあり、恒星天も音を出すしたために、二つの天球が同じ力を持つとしたのだと考えられる。Zeller は、キケロは明らかにヘプタコードとオクターブを考えていたのだと述べ、Meissner もテルパンドロスのヘプタコードに言及している。ヘプタコードは、リラやギターなどの七弦琴を指すとともに、現代の音楽用語としては七音階または七度の音程を意味する。八つの天球が七つの音を出すとするために、「水星と金星は従者のように」という箇所を手掛かりしたものであるが、この二つも軌道は違うはずだから理屈としては違う音を出すはずではあるが。

こうした考えに対してたとえば Powell は、キケロの言葉の最も合理的な解釈によればと前置きし、この二つの天球は月と恒星天であり、恒星天は月よりも1オクターブ高い音を出すのだとしている。オクターブ隔たった音の間に他の六つの天球の音が外側にいくほど高い音で並び、全部で七つの音になるという数え方である。これ

を七つとするか八つとするかは数え方の問題であり、七音音階のオクターブと言うことになるのであろう。この場合に、月と恒星天の天球が同じ *vis* を持つことになるが、Powell はこれを効果・影響 (effect) と訳し、Büchner は響き (Klang) と訳している。

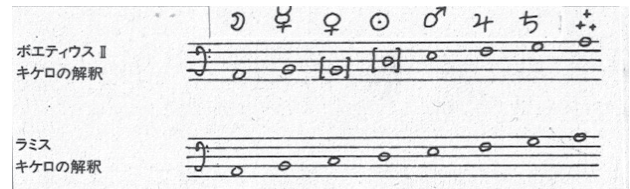


図2. 月から恒星天に音をあてはめたもの。
ゴドウィン p.212 より。

スキピオがあこの夢を見てから三年後の前146年、彼はいままさに陥落しようとするカルタゴを目の前にしている。後二世紀のアレクサンドリアの歴史家アッピアーノスが描く場面をほぼそのまま引いている塩野七生『ローマ人の物語Ⅱ』から少し長くなるが引用する。

スキピオ・エミリアヌスは、眼の下に広がるカルタゴの都市から、長い間眼を離さなかった。建国から七百年もの歳月を経て、その間長く繁栄を極めていた都市が、落城し、瓦礫の山と化しつつあるのを眺めていた。(…) 勝者であるにもかかわらず、彼は思いを馳せずにはいられなかった。人間にかぎらず、都市も、国家も、そして帝国も、いずれは滅びることを運命づけられていることに、思いを馳せずにはいられなかったのである。トロイ、アッシリア、ペルシア、そしてつい二十年前のマケドニア王国と、盛者は常に必衰であることを、歴史は人間に示してきたのだ。意識してか、それとも無意識にか、ローマの勝将は、ホメロスの叙事詩の一句、トロイ側の総司令官であったヘクトルの言葉とされている一句を口にして、「いずれはトロイも、王プリアモスと彼に続くすべての戦士たちとともに滅びるだろう」背後に立っていたポリビウスが、なぜ今その一句を、とローマの勝将にたずねた。スキピオは(…) 答えた。「ポリビウス、今われわれは、かつては栄華を誇った帝国の滅亡という、偉大なる瞬間に立ち会っている。だが、この今、わたしの胸を占めているのは勝者の喜びではない。いつかはわがローマも、これと同じときを迎えるであろうという哀感なのだ」

カルタゴの最後を見とどけるローマの勝将の心をよぎった無常観はキケロの『スキピオの夢』の根底にもある。夢のなかで天界から広大な宇宙を眺める小スキピオは、地球があまりに小さく見えるのに驚き、また祖国ローマはそのほんのわずかの部分を占めるに過ぎないのを見る。その無常観の裏返しに、数限りない星が集まり白銀に輝く天の川は、この世をよく生きた者たちの魂が帰っていく場所とされる。

あの夢を見てから二十年たった前129年、小スキピオがその夢を友人たちに語るその年に、夢のなかで大スキピオが予言した「完全数」とされる「七」の「八

倍回」の56歳になった彼は、グラックス兄弟につながる何者かの手にかかってこの世を去る。キケロは夢を語るスキピオに半ば死を予感させていたことになる。このように巧みな場面設定をした『スキピオの夢』の著者たるキケロ自身も、その執筆後十年ばかりたった前43年アントニウスの放った刺客の手に倒れるのである。

第2部 補足

1) 天球の回転の方向

九つの天球のうち、一番外側の圏が恒星の天球で、中心には不動の地球が位置する。その間にある七つの天球は外から順に土星、木星、火星、太陽、金星、水星、月の軌道を含む層である。大気圏や成層圏のような形の層をなす球——プラトンの場合には入れ子になった椀のような構造——にそれぞれ諸惑星・太陽・月の通る軌道が敷かれていて、それが異なる速度で回転していると想像される。その回転の様子は、「この下につきつぎ続いて、七つの球がある。それらは、天空と反対の方向へ動きながら、後向きに回っていく」と説明される。

はたして反対周りに回転すると解釈していいのかどうか。というのも、仮に内側にある七つの天球が回転しないままとしても、恒星天が1日に1周すれば、中心にある不動の地球からは惑星や太陽や月が星座の間を1日で1周するように見えることになり、七つの天球が逆方向に回転することになれば、動きはさらにいっそう早くなるはずである。地上から見た場合の東から西への天体の日周運動と西から東への太陽などの年周運動を天動説で説明しようとするれば、恒星天と他の七つの球の進む方向は右回りと左回りといった逆方向の廻り方ではなく、同じ方向に廻りながら他の球の角速度が恒星天のそれに比べて概して少し小さいために、恒星天からすれば他の七つの球がふつう（現代の天文用語でいう逆行の場合を除いて）少しずつ遠ざかって行くように見えるとしなければならないであろう（cf. Powell p.159; Zetzel p.23）。

こう考えれば、キケロのこの著作の構想のもとになったとされるプラトン『国家』617Aの「紡錘の全体は同じ方向に回転して回転運動を行っているが、回転するその全体の中で、内側の七つの輪は、全体と反対の方向にゆっくり回転する」（ように見える）という記述と合致する。キケロの原文は *in quo sunt infixi illi qui voluntur stellarum cursus sempiterni. huic subiecti*

sunt septem qui versantur retro contrario motu atque caelum で、恒星天の回転については *volvo* の中動的受動態であり「回る、巡る」と訳せる。その内側の七つの球については *verso* の中動的受動態が用いられている。この語は Lewis and Short の辞書で ‘to turn one’s self often, to turn, revolve, etc.’ の訳語のもとにキケロのこの箇所が挙げられているが、研究社の羅和辞典には「回る」の意味は見当たらず、「歩きまわる、出入りする、(ある場所に) とどまる、(ある状態) いる」などが載るだけである。語源的に *verso* は *verto* (向ける) から派生した反復相動詞 (frequentative or iterative) と考えられるが、この反復相動詞が中動態で用いられた場合を、できるだけ合理的な天動説を想定して、恒星天に引きずられるようにして回る諸惑星の様子にあてはめてみる。すると、たとえば犬が飼い主に引張られて歩きながら、時に踏ん張ってとどまろうとしたり後戻りしたりするような、そういった動きが *versantur retro contrario motu* から感じられないだろうか。「留」や「順行」（逆行ではなく）といった恒星天に逆らう惑星の動きを、キケロはこの場合反復相中動態で、後方へ引きずられると表現しているのではと想像してみるのであるが。

2) 太陽と金星と水星

今日われわれは地動説が正しく、太陽が中心にあって水星と金星は地球の軌道の内側を回る惑星と呼ばれることを知っている。この二つの惑星は地球の内側を回るために地上から見て太陽と角度が一定以上に離れることがない。天動説ではこの現象が、太陽に近い角速度で前後しながら二惑星が地球の周りを回ると説明されることになる。キケロはこれを「水星と金星は従者のように太陽に侍り従う」とユーモアを込めた面白い表現をしている。プラトンの『国家』の中では天空のそれぞれの輪に歌声で人を魅了するセイレンが乗っていて、「全部で八つのこれらの声は、互いに協和し合って、単一の音階を構成している」とされる¹⁾。太陽と金星と水星の順序が異なり、月が一番内側を回るのは同じであるが速度が一番早いとされてキケロとは逆である。これは地上からの観察から実感される動きを基にしているからであろう。また太陽・金星・水星についても外から「第七番目・第六番目・第五番目の輪がその次に早く、互いにいっしょに動く」といわれるが、これ

はキケロが「水星と金星は従者のように太陽に侍り従う」と表現しているものと同じである。地上から見て太陽の前に行ったり後に就いたりしながら近くを離れることがない惑星の動きを言いえて妙というべきであろう。ところでキケロは水星を実際に見たことはあったのだろうか。金星は宵の明星・明けの明星として馴染み深い、水星は太陽に近くて極めて観測しにくい惑星である。あの地動説を唱えたコペルニクスが生涯水星を見たことがなかったという有名な伝説がある。いつも薄明の中で見つけづらいという逸話にしても、緯度か何かの関係でキケロのローマからなら見えやすいということもあるかもしれない。テレビもパソコンもない二千年の昔、人々の目もよかっただろうし、空気はもっと澄んで星も見えやすかっただろう。しかしもし太陽に近すぎて見つけにくい水星をキケロが見たことがなかったとしたら、太陽と水星は軌道の力が同じ二つの天球だと想像したとは考えられないであろうか。プラトンなら外から「第七番目」と「第五番目の輪が互いにいっしょに動く」と言うところを、「二つの（軌道の）力は同じ *eadem vis est duorum [cursuum]*」と戯れに言ったとは。天動説に立つ場合、太陽と水星の角速度は他のどの天体と比較しても極めて近い値になるはずである。ただし七つの間隔ないし音を問題にする時、太陽と水星としても、先の金星と水星の場合と同じく、軌道が違うのだから音も違うことになるのではあるが。

3) 七と八

「かの八層からなる軌道は、それらの中の二軌道は同一の速度であるために、音程を異にした七音を発している（池田訳）」「星々が進むあの八個の道は、それらを隔てている相間（あいま）の差異に応じて、それぞれ、明確に区分される音を作り出しているが、これらの道のうちには、動きの力の同じものが二つあるので、音の種類は七つとなる（水野訳）」「その八つの軌道は、そのうち二つが同じ速度をもつので、環の間隔によって区切られる七つの音を生み出す（岡訳）」

邦訳はいずれも、水星と金星の *vis* が同じとする解釈に基づき、八つの軌道は、そのうち二つは *vis* が同じなので、音名の違う七つの音を出すとする。*vis* は「速度」または「動きの力」と訳され、*intervalla* は軌道の「間隔・相間」または「音程」と訳される。

これに対し月と恒星天の *vis* が同じとする比較的最近の

Büchner, Powell, Zetzl などの解釈をまとめて単純化すれば、およそ以下ようになる。八つの天球の軌道は、うち二つが同じ響きをもち、七つの音程の異なる音を出す。不動の地球の周りをまわる八つの天球のうち、一番内側の月を仮にドとするなら、水星はレ、金星はミ、太陽はファ、火星はソ、木星はラ、土星はシ、一番外側の恒星天は月より1オクターブ高いドである。七 (*septem*) が音 (*sonos*) にかかるのか、間隔 (*intervallis*) にかかるのかは見解が分かれる (cf. Büchner p.481; Zetzl p.241)。間隔に関しては、音を出す八つの天球の地球からの間隔とすれば八つであり、八つの天球の相互間隔とすれば七つである。7音音階のオクターブも、オクターブ離れた音を同じととれば七つであり、異なるととれば八つである。この箇所では、いずれもどちらともとれる曖昧な表現のように思われる。弦の長さの比と音程の間にある関係を太陽・月・惑星・恒星天の距離に見出そうとするのは確かにロマンに満ちている。星座の間をさまようように見える惑星などの動きに人間の運命を結びつけるとき占星術が誕生する。大スキピオは小スキピオにこう予言している。「おまえの齢のめぐりが、太陽の黄道湾周ないし回帰を、七の八倍回だけ数え終えて、どちらもそれぞれ別個の理由で完全数と見られているこの二個の数が、自然界の周行を手がかりにして、おまえの宿命と深い関係にある相乗積を作りあげたとき」、すなわち 56 歳のときに、小スキピオはローマで最高の地位に上りつめるか、それとも身内の者の手にかかるのだと。

duorum を「金星と水星」や「太陽と水星」とせず「月と恒星天」と考える場合、*vis* を速力や動力や角速度とせず音響と訳せるかどうかはよくわからないが、月から水星、水星から金星というふうの間隔を数えて、土星から恒星天に至るまで合わせれば、七つの間隔で隔たる八つの天体が七音音階のオクターブの和音を出す結論できそうである。

4) 宇宙論と音楽と国家論の調和と秩序

「スキピオの夢」は『国家について』の最終第6巻の一部とされる。夢の中で展開される宇宙と音楽に関して、キケロは当時の宇宙論や音程に関する科学的な側面を追求しようとするよりは、むしろ文学的に、宇宙と音楽の比喩によって祖国ローマの理想像を描こうとしたと考えられる。この場合に君主制と貴族制と民主制を

調和させたものを共和制と呼ぶべきかはよくわからないが、神の支配する宇宙とその音楽というイメージに理想的な国家の調和・共和の精神と言ったようなものを重ね合わせようとしていたと思われる。

hic est (…) ille qui intervallis coniunctus inparibus, sed tamen pro rata parte ratione distinctis, impulsu et motu ipsorum orbium efficitur, et acuta cum gravibus temperans varios aequabiliter concertus efficit;

これは、等間隔ではないが理に即した一定の比に従う間合いで並ぶ諸天球の周回によるエネルギーから生みだされる音で、高低を按配して様々な協和音を生み出している

この表現の中の *temperans* (規制しつつ) や *aequabiliter* (平等に) といった語には明らかに政治的なニュアンスが含まれていると Zetzel (p.241) は言う。『国家について』の掉尾を飾るべく「スキピオの夢」が構想されたのだとすれば、ここで描かれる宇宙とその音楽の秩序には、地上における国家の理想像が重ね合わされていると推測される。『国家について』第2巻69にはやはり音楽の比喩を用いながら、共和制ローマのあるべき姿が直喩で語られている。

竝琴や笛で、また歌そのものや声でも、様々な音程の音から和音なるものが生じなければならず——鋭い聴覚の持ち主ならその調子が外れたり合っていないなかったりすると我慢がならないほどだ——また異質な声も巧みな指揮によって合わされば美しいハーモニーをなす。そのように共同体も中庸の道を行くことで、貴頭も下層民もその間にある中流階級も含め、かけ離れた多様な者たちの協和によって、様々な音の場合と同じように共に声を合わせることができる。歌でハーモニー (*harmonia*) と音楽家が呼ぶもの、それは国家においては協和 (*concordia*) であり、これは強固な絆としてあらゆる共同体の安寧秩序の礎となるが、正義 (*iustitia*) なくしては決して実現され得ぬものである。

音を合わせて和音が生じるように、心を合わせて共同体の一致団結が生まれる。正義という言葉が見られるが、これは今日語られる平等社会が前提とされているのではなく、当時の貴賤貧富の違いを前提としつつ、中道を行き各階層のバランスを保つことと考えられ、この正義の実現が国家の理想とされたのであろう。

このような観点から先に述べた天空と反対の動きで後ろに向かうという表現を考えてみればどうであろう。宇宙の姿としては、恒星天に引きずられるようにしてその下側 (内側) を回る5惑星と太陽と月が描かれているが、これを少し擬人化すれば、多少の反動は呑みつつ全体としては同じ方向に回っていく統率のとれた国家の姿がイメージできるように思われる。スキピオの夢の舞台設定となる前2世紀の終わりころからキケロの死後しばらくの間までは、ローマ史で内乱の1世紀と形容される。 *subiecti* (下に置かれた、服従した) や *contrario* (反対の、背く) などにも政治的なニュアンスを感じ取ることができるとするなら、キケロは宇宙の姿に国家の姿を投影したのだといえるだろう。

huic subiecti sunt septem qui versantur retro contrario motu atque caelum

恒星天の下にあって天に逆らう動きを見せ後ろへ彷徨う七球も天の支配は免れない

おもな参考文献

- 1) Meissner, C. M. *Tullii Ciceronis Somnium scipionis, für den Schulgebrauch*. Teubner 1915. 6. Aufl.
- 2) Keyes, C.W. *Cicero: de re publica and de legibus*. (Loeb Classical Library) 1928.
- 3) Zeller, E. *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung*. Georg Olms 1963
- 4) Zekl, H.G. (tr.) *Cicero, Gedanken über Tod und Unsterblichkeit* (Philosophische Bibliothek Bd. 273) 1969.
- 5) Büchner, K. *M. Tullius Cicero, de re publica*. Heidelberg 1984.
- 6) Powell, J.G.F. , *Cicero: on friendship and the dream of Scipio*. Warminster 1990.
- 7) Zetzel, J.E.G., *Cicero: de re publica*. Cambridge 1995.
- 8) E. ローゼンツ, L. モッツ 『宇宙論全史』平凡社 1987.
- 9) J. ゴドウィン 『星界の音楽』工作舎 1990.
- 10) S.K. ヘニンガー・Jr. 『天球の音楽』平凡社 1990. キケロの邦訳は注4参照。

注

- [1] 第1部は和歌山大学教育学部の仲間内で出した雑誌コードもない三号雑誌「NORTE 人文学研究」第3号(1994)に載せたものを書き改めたものである。第2部にはその後の研究も加えた。
- [2] 神子博昭訳
- [3] 大山定一訳
- [4] 以下特に断わらない限り本稿で括弧付きで用いた邦訳は水野有庸訳『スキピオの夢』(『世界の名著13』中央公論社1968所収)による。ほかに池田英三訳が「スキピオの夢」研究(北海道大学人文科学論集2)(1963)p.1-32に、岡道男訳が『キケロー選集8』岩波書店1999にある。また山下太郎『ラテン語を読む キケロー「スキピオの夢」』ベレ出版2017。池田は語注が詳しく、山下は語の活用・曲用に。
- [5] プラトン『国家』の邦訳はすべて藤沢令夫訳(岩波文庫)から。